

# 「本のまち八戸」の散策 ～新たなミュージアムと作家の面影

仙台市民図書館長  
村上 佳子



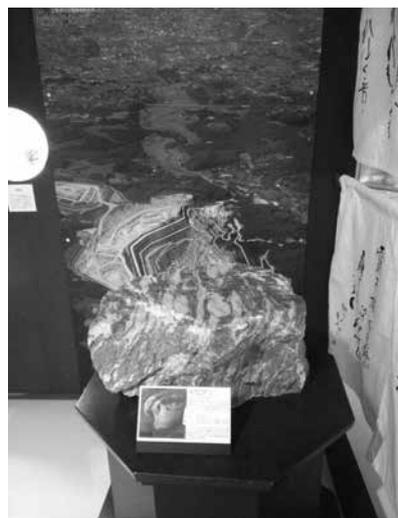
1月下旬の寒い日、大人の休日倶楽部パスを片手に新幹線に乗り込みました。向かうは八戸市、「本のまち八戸」に取り組み、市が運営するブックセンターが話題となっていましたので、一度訪ねてみたいと思っていた所です。

東北新幹線の八戸駅から八戸線に乗り換えて10分たらずで本八戸駅です。1971年、東北本線の尻内駅が八戸駅に、従来の八戸駅は本八戸駅に改称されたとのことで、地元の方は、本八戸駅をホンパチと呼んでいました。両駅間はバスも頻繁に運行され人の流れもあり、双方とも賑わいのある印象を受けました。

雪が氷になって張りつく駅前の道を転ばないように気をつけながら歩き、まずは八戸の玄関口を意味する八戸ポータルミュージアム・通称「はっち」に行ってみました。東日本大震災の年、2011年2月にオープンし7年を迎えるミュージアムは、地域の資源を大切にしながら新しい魅力を作りだすことをコンセプトにしています。この地方に伝わる郷土玩具の八幡馬（やわたうま）で作られたボールに出迎えられて館内に入ると、ボランティアガイドの柔らかな案内がありました。

青森県が誇る3つの国宝（合掌土偶、白糸威褰取鎧、赤糸緘鎧）がすべて八戸にあること、無形文化財の二つの祭り（八戸三社大祭、八戸えんぶり）を紹介する展示ブースや、地域ゆかりのアーティストの作品をふんだんに取り入れた様々な意匠、市民の活動を支援する場や仕組みなど、まさにコンセプト通りのミュージアム「はっち」の魅力を解説していただきました。その中で展示ブースの一つ「八戸キャニオン」が目にとまりました。こ

れは、日本で一番空から遠い地面といわれるセメント原料の石灰石の採掘場です。露天掘りで進められている現場がパネルで紹介されており、すり鉢状の地層はなかなかの迫力です。次の機会には是非この石灰鉱山を訪れ展望台からの絶景を眺めてみたいと思いました。



「八戸キャニオン」の展示

「はっち」からほど近いビルの1階が八戸ブックセンターです。100坪に満たないスペースですが、書店であり、ミュージアムであり、ブックカフェであり、読書スペースであり、書齋スペースでもあります。市の直営で、一般の書店で販売している本や新刊本などはなるべく置かず、個性的な奥行きのある選書で本が並んでいます。ブックセンターのコンセプトは「本を読む人を増やす、本を書く人を増やす、本でまちを盛り上げる」とのことで、本のまち八戸を進める現職市長の政策が体现された施設です。図書館は別にありますが、市の中心街にこのブックセンターを設けることで、本のある暮らしが日常となり、まちの文化的な活気

につながることを目指しています。

施設内のカウンターで青森産りんご「紅玉」のフレッシュジュースを注文し、八戸が生んだ作家・三浦哲郎の書斎を再現したコーナーに腰掛けて、爽やかな甘みと酸味を味わいながら魅力的な本の空間でしばしの時間を過ごしました。



ブックセンター内の三浦哲郎の書斎再現コーナー

三浦哲郎は1931年に八戸で生まれ、早稲田大学に進学後1861年「忍ぶ川」で芥川賞を受賞しています。生家は呉服商を営み、姉3人と兄2人の6人きょうだいの末っ子でした。6歳の時に次姉が自殺、さらに先天性の病をもつ長姉も自殺、2人の兄も相次いで行方不明となり、家族の問題が暗い影を落とすなかで育ちます。「忍ぶ川」は、地方から進学した大学生と割烹で働く女性との出会いと結婚までが描かれた私小説で、作者自身の境遇が色濃く投影されています。お互いに言い出しがたい家族の事情をかかえた2人が、それを打ち明け合いふるさとの東北で寄り添って生きることになるこの作品は、栗原小巻と加藤剛の主演で映画

化もされています。作家は他にも多くの作品を残し、八戸ブックセンターでは三浦哲郎の短編集『野』の文庫本にオリジナルカバーを作るワークショップが開かれるなど、八戸のひそかなベストセラーとなっているとのこと。

ブックセンター内の書斎再現の他、市の公会堂前には三浦哲郎文学碑が立ち、「はっち」の中にも展示コーナーが設けられ、八戸市内にはこの昭和の私小説作家の足跡がしっかりと残されていました。



三浦哲郎の文学碑

昭和のたたずまいを感じる八戸の風情には連鎖街があります。八つの横町に屋台規模のちいさな飲食店が軒を連ねており、そのなかの一つ「みろく横丁」に午後の早い時間から灯りがともる一軒を見つけ、戸をくぐってみました。外は氷点下に近い寒さですからまさに天然の冷蔵庫、店脇に置かれたトロ箱から蛤に似た姫貝を取り出して焼いてもらい、それを肴に地元のお酒「八仙」の熱燗を一杯いただいて、ホンパチに向かいました。